

広場

毎日俳壇

井上 康明選

誰も見ぬ地獄極楽曼珠沙華

筑西市 大久保朝一

△評▽マンジュシヤゲのおどろおどろしい印象から地獄極楽を連想したのだらう。とはいうものの、誰も地獄極楽を見たことはない。トタン打つ二百十日の夜の雨

白杵市 村上 玲子

△評▽二百十日は9月1日ごろ。農家は台風に備える時節。トタン屋根の夜の雨音に不安が募る。生国は神宮の杜ちちろ鳴く

鎌倉市 小川 求

妻の忌の鈴虫庭に放ちけり

富士市 後藤 秋臣

人の声静まりてより小鳥来る

北九州市 寶満 光保

あの空に何を夢見る赤とんぼ

行田市 吉田 春代

山嶺に蛇笏忌の月浮かびをり

越谷市 安居院半樹

突つ掛けのまま足浸す水の秋

東京 望月 清彦

旅人の吾も一人や草紅葉

平塚市 日下 光代

いちまいの湖いちまいの秋の空

浜松市 久野 茂樹

片山由美子選

声こぼしつつ鶴の遠さかる

川口市 高橋さだ子

△評▽セキレイの鳴き方には何種類かあるようだが、チチチチという声をよく聞く。声こぼしつつ」が独特の飛び方を思わせる。ポケットにポケット図鑑茸狩

横浜市 菅沼 葉二

△評▽知らないものはすぐ調べて確認するのだ。「ポケットにポケット図鑑」のリズムが楽しい。誰彼となくよく釣れて鰯日和

海南市 塚月 凡太

通り雨過ぎてたちまち草いきれ

横浜市 古木 民子

糸瓜棚腰をかかめて通りけり

稲沢市 永翁 明代

ほころびもなく脱ぎたての蛇の殻

湖西市 宮司 孝男

煙みな隣へながれ庭花火

小田原市 林 梢

初秋の卓に新書とカプチーン

東京 徳原 伸吉

どの雲が一番似合ふ秋の空

明石市 小田 慶喜

秋澄むや家のどこかで電子音

羽生市 柴崎加代子

小川 軽舟選

セザンヌの青き山塊涼新た

大津市 星野 暁

△評▽セザンヌは故郷のサント・ピクトワール山を繰り返して描いた。絵に眺める「青き山塊」が秋の涼気にふさわしい。朝顔や保育園児の朝早く

平塚市 小林 耕平

△評▽母親の出動前に保育園に連れて行くのだ。がんばる母と眠そうな子を朝顔が励ます。木炭の素描に掠れラフランス

京田辺市 加藤 草児

勤行の朝宿坊の蓮開く

神戸市 松元 一師

山裾に家の灯ひとつ夜這星

さいたま市 齊藤 真人

容赦なき雨の八月十五日

さいまき市 景山 典子

玉砂利を踏む音著し秋の寺

佐久市 土屋 正一

翅あるを曳く蟻群れて秋めけり

東京 高木 靖之

朝顔や座席三つの散髪屋

つくば市 有阪 貴男

遮断機の明滅長し秋暑し

野田市 押江 成行

西村 和子選

草に寝て雲見ること秋の旅

川崎市 峰尾 雅彦

△評▽こんな何でもない行為も、秋の旅先ならではの楽しみ。暑さも去り、ヤブ蚊も刺さない。高々と流れる雲の形が見える。星涼し洗濯物を干し終へて

和歌山 馬谷富貴子

△評▽夜すぎの後だらう。星の光も涼しいが、何よりすっきりすがすがしいのは作者の心境だ。のりしろに糊のしみ出す震災忌

東京 野上 卓

秋暑く義理の詰まりし旅靴

東久留米市 夏目あたる

始発待つ村人ひとり霧の中

葛城市 山中 由子

しなふだけしなひて雨の花芒

日高市 落合 清子

秋蟬の声のかすれて雨兆す

川口市 高橋さだ子

露草へ関伽桶の水こぼし遣る

平塚市 高橋 佳代

深煎りの豆を選びて今朝の秋

東京 茂田野マイ子

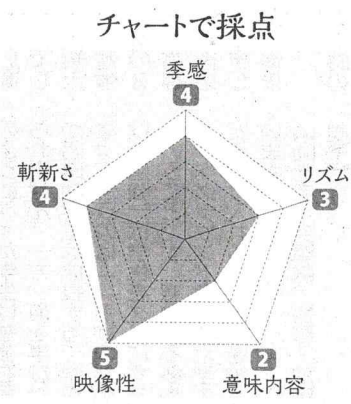
雑踏を抜け公園の蟬涼し

横浜市 相沢恵美子



注目の一句

塩見恵介



この時期、田園や墓地を訪れるとそここに列なす彼岸花を見る。燃えるような朱色に人界の情念や追慕を想起し、一句を作ろうと試みるが、その感覚は視覚的な写生の発想というよりも、名の方に多分に影響を受けた理知的な表現処理というべきで、得てして常識的範ちゅう、凡作となる。

掲句は、並み咲く彼岸花の様子と、近年の異常気象の呼称の一つを「線状」という語でつなぐ二句一章である。破調ながら最後に置かれた「接近」も、線状降水帯による不安感が彼岸花の強い紅に色濃く象徴される。漢字ばかりの字面でインパクトが強いが、内容的にも薄暗い雨雲の下の彼岸花の対比が、多様な読みをもたらす。

(おみ・けいすけ「俳人」)

アプリ 俳句をふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 毎日新聞社は富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら